

## 「復興10年総括検証ワークショップ」報告書（案）の概要

### 1 はじめに

阪神・淡路大震災からの復興にあたっては、わが国が成熟社会に向けて大きな転換期を迎えるなか、「共生」の理念の下、県民の参画と協働による様々な取り組みが展開されてきた。

こうした10年間の復興過程の検証にあたっては、復興の主役である県民の目から見て、何ができて何ができなかったのか、将来に生かすべきことは何かといったことを把握する必要がある。

そのため、被災地を5地域に分けて地域別ワークショップを開催するとともに、それを踏まえて総括ワークショップを開催することとし、参加者を公募した。

### 2 ワークショップの視点・手法等

#### (1) テーマ

「10年間を振り返って」

- ・復興10年で被災地ができたこと、できなかったこと

「将来に向けて」

- ・将来に向けて生じていくべきこと、発信していくべきこと

#### (2) ワークショップの手法

##### 地域別ワークショップ

参加者を5～6班に振り分け、2つのテーマ（「10年間を振り返って」、「将来に向けて」）について、各参加者が意見を出し合うグループワークを行った。

参加者が記入した意見（1人3項目程度）について、KJ法により集約し、班毎のまとめを作成した。さらに、ファシリテーターの進行のもと、各班のまとめを会場全体で集約し、地域全体の意見としてとりまとめた。最後に、参加者全員がそれらの意見のうち、重要と思うものに投票し、順位付けを行った。

##### 総括ワークショップ

5地域の代表者が集まり、地域別ワークショップで集約された意見の確認及び修正作業を行った後、ファシリテーターの進行のもと、参加者全員でそれらを踏まえ、被災地全体の意見として集約していった。

最後に、参加者全員が集約した意見のうち、重要と思うものに投票し、順位付けを行った。

\* ファシリテーター（進行役）  
立木茂雄（同志社大学教授、復興10年委員会委員）

### (3) ワークショップの開催状況

日 時	地 域	会 場	参加人数
平成16年 6月5日(土) 14:00~17:00	淡 路	東浦町立サザインホール	42名
6月6日(日) 10:00~13:00	阪神北	宝塚市西公民館	44名
6月6日(日) 14:30~17:30	阪神南	西宮市民交流センター	44名
6月12日(土) 10:00~13:00	神 戸	県立神戸学習プラザ	53名
6月20日(日) 14:00~17:00	明石・三木	明石市立産業交流センター	45名
7月4日(日) 14:00~17:00	総 括	人と防災未来センター	51名

## 3 ワークショップの実施結果

### (1) 地域別ワークショップの結果

「10年間を振り返って」

・復興10年で被災地ができたこと、できなかったこと

各地域で集約された意見のうち、「防災意識は高まったが、次の災害への備えは十分でない」(5地域のうち3地域で1位)、「地域のつながりが広がった」、「ボランティア活動が活発になった」、などは、各地域とも共通して上位となっている。地域のつながりについては、一方で「一時に比べれば薄まりつつある」、「新しいまちでは不足している」、「新旧住民のつながりがまだ不十分である」といったこともあわせて指摘されている。

また、必ずしも上位にはなっていないが、心のケアが不十分とか心の復興が残っているといった意見は、すべての地域で顔を出しているほか、ハード面の整備は進んだが、まちの景観に地域差がみられるなどの意見もある。

経済面での復興が途上といった意見も出ているが、阪神南地域では4位であるのに対し、阪神・淡路北や明石・三木地域では最下位となっているなど、地域間のばらつきが大きい。

その他、淡路地域では、「復興整備事業は進んだが、昔の思い出の町並みが消えた」(3位)、阪神北地域では「行政のできたこと、でき

なかったことの評価は様々であるが、市民活動支援を活発にしてほしい」(2位)が上位になっている。

地域別ワークショップの主な意見 「10年間を振り返って」

順位	課題	阪神北		阪神南		神戸		明石・三木		
		票数	意見	票数	意見	票数	意見	票数	意見	
1	防災意識はめばえたが、次の災害への備えはまだ十分でない	34	ボランティア、NPOなどによる市民力が高まった。	30	地域ネットワーク、グループ活動やコミュニティのつながりは向上したが、新しいまちでは不足している。	33	防災への意識が高まったが、減災への備えや防災意識を継承することがまだまだできていない。	31	家族や地域の防災意識が芽生え、災害の備えが進んでいるが...	36
2	地域のつながりが広がったが、震災を知らない人が増え、つながりも一時に比べれば薄まりつつある。	30	行政のできたこと、できなかったことの評価は様々であるが、市民活動支援を活発にしてほしい。	29	震災体験で得た意識が風化して、備えや防災対策が不十分だ。	31	ボランティア活動の意識が高まり、活性化し、個人でも参加できるようになった。	25	震災を機に復興支援ボランティア活動がはじまり、ネットワークがはじまった。	32
3	復興整備事業は進んだが、昔の思い出の町並みが消えた	30	震災の記憶が風化し、危機意識がうすれている。	28	防災意識は向上したが、今後の災害に対する備えはまだだだ。	27	一部では地域コミュニティや新しいネットワークが広がっているが、新旧住民のつながりがまだ不十分である。	19	非常持ち出し袋・心臓蘇生法、震災を忘れない行事も含めて、防災や安全対策に取り組みようになった。	30
4	ボランティア活動が活発になった	26	コミュニティ活動や市民同士のつながりが生まれた。	27	新しい産業の仕組みなどは生まれたが、経済の復興はこれからだ。	23	震災のときに助まじや人の輪の大切さが身にしみたが、まだまだ心の復興が残っている。	19	弱者への生活援助や高齢者福祉への取り組みを考えるべきである。	28
5	災害直後は知識や経験もなかったために、きめの細かい初期対応や情報の受け渡しができなかった。	21	10年後検証をきっかけに災害時対策を考え直す。	23	ボランティア精神のめばえ	22	震災の記録と記憶を伝えなければならない。	19	震災によって隣近所のコミュニケーションが高まり、コミュニティの共助精神ができた。	23
6	住宅の復旧はかなり早く進んだが、その一方で元の場所に戻れないなど問題も残した。	19	防災意識が高まった。	22	ほぼハードの復旧はできたが、まだまだなところもある。	19	行政の取り組みが遅れている。	19	人の心や精神的な復興はまだできていない。	22
7	道路、橋は整備されたけれども、地域経済はまだ復興途上	13	心のケアが不十分である。	16	制度未整備が大きい行政に頼らず自ら行動する大切さが実感できた。	18	建物やまちの景観の復興に地域差がみられる。	18	災害復旧や町並みの整備は進み、ビルや住宅ができたが、環状鉄道やため池の改修など、できなかったこともある。	20
8	震災直後もつとケアがあればよかったし、今でも心のケアを必要とする人もいる。	11	自助は達成されたが、互助は進みつつある。	9	震災の経験を発信し、復興から次のステップに進みだした。	7	災害弱者といっても一くりにできない。個別の理解に基づくケアが必要だ。	18	震災現場の体験への思いが今もある。	10
9	まだ環境整備が進んでいない。	10	バリアフリー住宅やインフラ整備ができた。	9	景観や芸術文化などまちの復興が遅れている。	6	10年前は若かったが、住民の自治的なリーダーの育成が必要である。	16	失業者が多く、仕事がなくなった。中小企業の復興もまだだ。	5
10	震災によって自然環境が破壊されつつあり、汚染問題が生活面に影響を与えている。	9	経済の再建は難しい。	5	健康第一のいちが大切だとわかった。	5	産業や家計の復興ができていない。	12		
11							この10年間の震災体験を踏まえ、みんな頑張って生きている。	12		
12							住宅の復興はまだら模様	9		

「将来に向けて」

・将来に向けて生かしていくべきこと、発信していくべきこと  
各地域で集約された意見のうち、「住民同士、地域のつながりを大切にしよう」など、地域のつながり、コミュニケーション、交流といったことの大切さを指摘する意見が5地域のうち、3地域でトップを占めた。

また、自助、共助、公助の相まった防災面の取り組みが大切といった防災対策に関する意見や、ボランティア活動の充実などは、多くの地域で共通して上位になっている。

その他、阪神南地域で1位となった「震災で得た経験や知恵を風化

させることなく、継承し、発信し、お返しをしていこう」といった意見も各地域で比較的上位になっている。神戸地域では「災害時に弱者には特別な対応が必要だ」という意見が1位になっており、これは同じく6位の「高齢者や弱者の多い住宅への様々な支援の取り組みが必要だ」という意見とあわせて、この地域の特徴といえる。

また、阪神南地域では、「公共物や住宅の耐震性を高めていくことが、安心して生活できるまちづくりには欠かせない」という意見が4位になっている。さらに、淡路地域では、「被害抑止等、被害軽減等、災害対応、復旧・復興のすべての局面で行政は力を入れてほしい」という意見が2位になっている点が、他地域にはみられない特徴である。

### 地域別ワークショップでの主な意見「将来に向けて」

順位	淡路	阪神北		阪神南		神戸		明石・三木	
		票数		票数		票数		票数	
1	住民同士・地域のつながりを大切にしよう	37	地域のことは市民が考え行動することから出発する。そのためには、日ごろからのコミュニケーションが大切だ	36	震災で得た経験や知恵を風化させることなく、継承し発信し、お返しをしていこう	36	災害時に弱者には特別な対応が必要だ。	35	地域の中の人と人とのつながりを深め、多様な交流を広めていこう。
2	被害抑止策、被害軽減策、災害対応、復旧・復興策のすべての局面で行政は力を入れてほしい	29	災害に強いまちづくりをしよう	35	災害に強い地域のつながりを強めリーダーを育てることが大切だ	32	1.17の体験を通し、今後も命の大切さを継承し、発信していくことが大切だ。	34	ボランティア精神を風化させずに、人間関係を大切にしていく感謝の気持ちを忘れないでいよう。
3	日ごろから自分たちでできる備えを実践しよう	27	ボランティア活動の振興、サポート、連携、組織化が大切だ	33	普段からの地域の人の和やつながりを地域の財産にしよう	23	様々な地域活動(ボランティア・NPO・自治会・CIB)がしやすい環境を整えていくことが大切だ。	32	震災体験や教訓を忘れずに、次世代や世界に伝えていこう。
4	災害に強いまちは住民と行政の対話が基本になる	27	地域の中でのふれあいや助け合いをさらに深めつづけていこう	31	公共物や住宅の耐震性を高めていくことが、安心して生活するまちづくりには欠かせない	21	地域の中の新旧・世代を越えたつながりやきずなをつくっていこう。	32	災害に強いライフラインを維持することの重要性を発信していこう。
5	ボランティアの受け入れや組織化を今後も充実させていくことが大切だ。	25	防災も福祉も行政・市民の協働が基本だ	28	防災は自助・公助の役割分担が大事だ	21	災害に対する自助・共助・公助の組み合わせを強めていこう。日常が非常を支える。	29	防災が効果的であるためには、自助・共助・公助の組み合わせが大切だ。
6	震災体験、復興体験の継承、発信をしていこう	21	被災地として、被災者としての体験を発信し、次世代に継承していこう	18	自助・自立・自助努力が大切だ	19	高齢者や弱者の多い住宅への様々な支援の取り組みが必要だ。	22	地域問題の解決のためには、県民と行政の参画と協働が重要だ。
7	安全・安心で美しく心豊かな住まいやまちをつくっていこう	17	国境を越えた防災のネットワーク作りに市民もかかわろう	12	災害対応時の情報発信や救助・救援の仕組みをさらに良いものにしていこう	15	こどものしつけは家だけでなく、地域もかかわろう。	21	災害に強く地域の景観を生かした街づくり・都市環境整備を県民は求めている。
8	この検証が復興の導きとなりえないように	9	災害対応時に自分たちができることがある。	4	軍中心ではなく環境や芸術文化に配慮した人間中心のまちを作りたい	10	早く安全・安心で豊かなまちにしたい。	18	外出困難な人達が自由にまちに出て行ける環境を整備しよう。
9	これから大切にしていきたい人生の価値を考えたい	4	被害抑止策を進めよう	2	県民が行政に望むことは、住宅を含む公的な支援システムをさらに充実させることだ	7			
10					家庭でできる災害への備えがある	7			
11					ボランティアをこれからも活性化していこう	6			

## (2) 総括ワークショップの結果

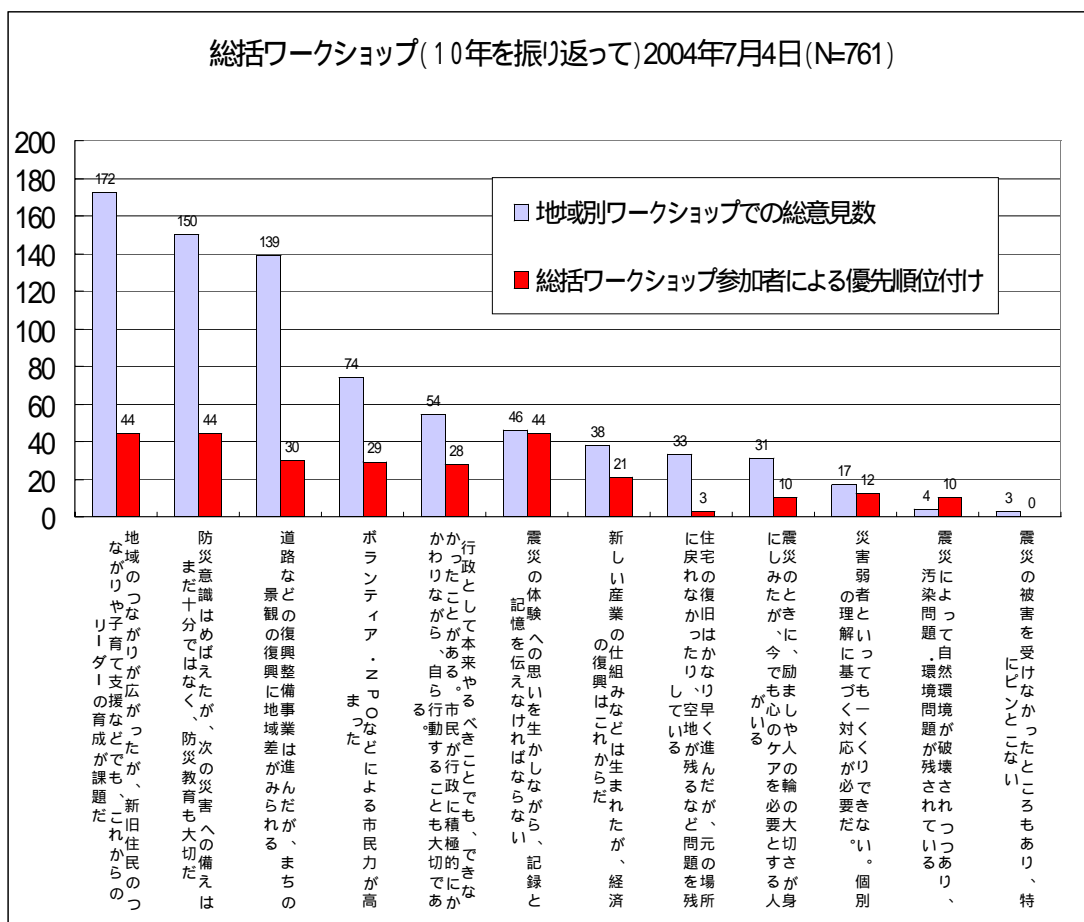
「10年を振り返って」

・復興10年で被災地ができたこと、できなかったこと

各地域のまとめを集約した結果、12の項目が被災地全体の意見としてとりまとめられた。投票による順位付けの結果、地域や住民のつながり及びリーダーの育成、災害への備えや防災教育の重要性、震災の経験・教訓の継承・発信、まちの景観の復興に対する地域格差などの項目が上位となっている。

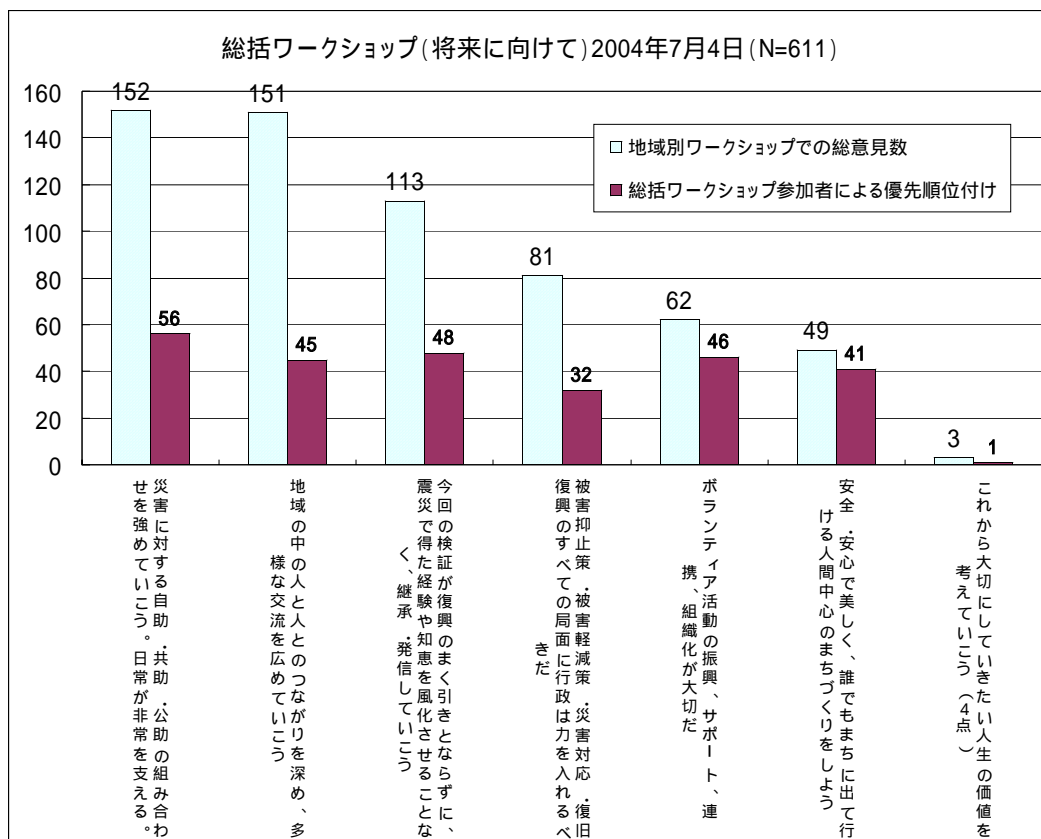
、 の項目については各地域でも、上位となった項目で、総括ワークショップにおいても同様の傾向がみられた。 の震災の経験や教訓の継承・発信については、各地域で、意見数、投票数ともにそれほど多くはなかったものの、総括ワークショップでは、上位になっている。

この他、ボランティア、NPOなどによる市民力が高まったとする意見も多かったほか、経済の復興、心のケアの問題も顔を見せている。



## 「将来に向けて」

・将来に向けて生かしていくべきこと、発信していくべきこと  
各地域のまとめを被災地全体の意見として集約した結果、7つの項目にとりまとめられた。投票による順位付けの結果、投票数が最も多かったのは、「自助・共助・公助の組み合わせの強化、日常が非常を支える。」という意見で参加者のほとんどがこの項目を重要としている。次に、「震災で得た経験や知恵の継承・発信」、「ボランティア活動の強化・支援」、「人のつながりを深め、多様な交流の展開」が上位になっている。これらの項目については、各地域によって順位付けに若干のばらつきはあるものの、概ね上位に位置づけられている。



## 4 まとめ

ワークショップで出された様々な意見について大きくまとめると、地域のつながりやコミュニティづくりの大切さ、防災意識の高まりを具体的取り組みに結びつけていく必要性、震災の経験・教訓の継承・発信といったことがあげられる。また、具体的対策にあたっては、行政の取り組みや一人ひとりの備えの実践とあわせて、自助、共助、公助の組み合わせの大切さも

指摘されている。

こうしたことは、阪神・淡路大震災の教訓として指摘される「共に生きることの大切さ」、「災害への備えの大切さ」といったことに通じるものであり、震災の経験・教訓を生かした今後の成熟社会に向けた取り組み方向が、被災地の県民意見として示されているのではないかと考えられる。

もとより、個々にみていくと投票数や意見のカード数の多寡にかかわらず、貴重な意見が数多く出されており、それらは、各地域ごとに親和図として記録に残されている。これらの意見を含めて、各方面での具体の取り組み方策を検討するなかで活用され、今後を生かされていくことが望まれる。

〔参考資料〕

「復興10年総括検証ワークショップ」報告書